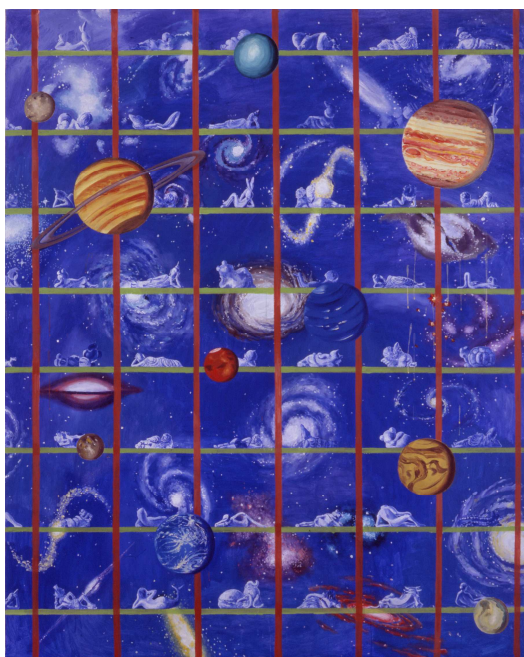




Yの冒険—原美術館コレクション

会期 2019年3月9日[土]—6月30日[日]

会場 ハラ ミュージアム アーク 現代美術ギャラリー



【図版1】横尾忠則『誰か故郷を想わざる』2001年©Tadanori Yokoo

いにしえよりアーティストたちは、冒険や挑戦を繰り返し、独自の表現スタイルを築いてきました。本展では、原美術館のコレクションから、大型の横尾忠則作品（5点）とやなぎみわ作品（8点）を中心に、日本で、昭和・平成と時代を疾走してきた「頭文字^{イニシャル}Y」の作家たちによる創作の軌跡を辿ってゆきましょう。

■横尾忠則作『戦後』は、磯崎新による特製フレームインスタレーション（再制作）付きで公開いたします。

講演会「Meet the Artist: 横尾忠則」を開催いたします。
詳細はホームページをご参照ください。

■横尾忠則『誰か故郷を想わざる』（2001年）

画面の奥には宇宙を思わせる深い青色の空間に浮かぶ星雲と、望郷の念にかられているかのようにそれを眺めながら横たわるいくつもの像（フィギュア）たち、そしてその重なりを私たち鑑賞者は俯瞰して眺めます。この手枕について横たわる姿は、古くから釈迦の涅槃図を踏襲するポーズとされてきましたが、画面中のある像はリラックスしているように、また別のものは蠱惑的な姿態にも見えます。横尾はこの横臥像に、生と死、聖と俗、男と女…といった二面性を見出し、自身の作品のモチーフとして描き続けています。

■横尾忠則『戦後』（1985年）

この作品は1986年にウォーカーアートセンター（ミネアポリス）が企画し、北米を巡回した「Tokyo: Form And Spirit」展のために作られた、江戸時代から近未来までの日本の歴史をモチーフに横尾が描いた7点組の陶板作品のうちのひとつです。『戦後』は終戦後の東京をモチーフに、東京大空襲直後の焦土のイメージに当時の人々の心のより所となったスターたち（「東京キッド」を歌う美空ひばりなど）が重ね合わせられています。平滑な大型の陶板にシルクスクリーンを施すという高度な技術を用いて、時代の明暗を刻み込んだ手法は、横尾自身にとっても新たな試みとなりました。今回展示する「特製フレーム」は、この作品が「Tokyo: Form And Spirit」展に出品された際に、会場構成を手掛けた（当館設計者でもある）建築家・磯崎新によってデザイン・展示された状態を、磯崎・横尾両氏の監修のもと再制作したものです。

横尾忠則

1936年、兵庫県西脇市出身の美術家。グラフィックデザイナーとして活躍、パリ青年ビエンナーレ展版画部門でグランプリを受賞（1969年）後、ニューヨーク近代美術館（1972年）をはじめとした国内外の主要美術館で個展を開催。1980年ニューヨーク近代美術館でのピカソ展を観覧したことをきっかけにその生き方に魅了され「画家宣言」を行う。長年にわたり絵画、デザイン、写真、小説やエッセイの執筆など、多岐にわたる活動を続け、毎日芸術賞、紫綬褒章、高松宮殿下記念世界文化賞をはじめ数々の賞を受賞している。原美術館では『横尾忠則 暗夜光路』展（2001年）を開催。2019年NHK大河ドラマ『いだてん』題字・ポスターデザインを担当。



【図版2】横尾忠則『戦後』1985年（2017年ハラミュージアム アークでの展示風景）©Tadanori Yokoo Photo by Shinya Kigure



HARA MUSEUM ARC



■やなぎみわ『My Grandmothers: AI』2003年

「My Grandmothers」は、やなぎが一般公募で選んだ20代の女性たちに「50年後の理想の自分の姿」をイメージしてもらい、対話を繰り返しながら本人をモデルにして作り上げていくシリーズ作品です。それぞれの作品にはそのシーンに添ったテキストが用意され、作品とともに展示されます。

今回展示する『AI』は子ども相手に占いをする高齢の女性を主役とした作品です。彼女は子どもたちが迎える退屈な未来を憂いながら、いつか自分の後継者となる少女が現れる日を待っています。

【図版3】やなぎみわ『My Grandmothers: AI』2003年© Miwa Yanagi

やなぎみわ

兵庫県神戸市生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。93年に京都で初個展後、ドイツ・グッゲンハイム美術館（2004年）など国内外で個展を開催する。第53回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館で個展（2009年）。原美術館では、少女と老女の物語をテーマにした「フェアリーテール」シリーズによる個展を開催（2005年）。近年は演劇作品も多く手掛けるようになる。現在京都造形芸術大学教授。



左【図版4】山口長男「かたち」1952年

右【図版5】米田知子「ヘッセの眼鏡—兵士の写真を見る」1998年
©Tomoko Yoneda

出品作家：やなぎみわ／柳 幸典／山口長男／山本 糾／矢柳 剛／横尾忠則／吉田克朗／米田知子
（8名 約30点）
長期展示：草間彌生／東芋

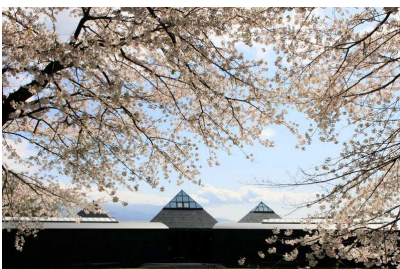
■ハラ ミュージアム アーク（群馬）について

1988年、原美術館の別館として群馬県渋川市に開館しました。上毛三山のひとつに数えられる榛名山麓に位置する美術館の、黒で統一されたシャープな外観は、豊かな緑に美しく映えています（設計：磯崎 新）。

近年はコレクション作品を中心とした企画展示、イベント、ワークショップの他、さまざまな教育普及プログラムを行っています。2008年には静謐な和の空間に仕上げた特別展示室「観海庵」と、専門家や愛好家に調査研究の機会を提供する「開架式収蔵庫」を新設。時代や地域の枠を越えた、多彩な美の表現を紹介しています。



【図版5】ジャン＝ミシェル オトニエル『Kokoro』
2009年 撮影：白久雄一



■ハラ ミュージアム アークの桜

標高500メートル、榛名山麓に位置するハラ ミュージアム アークでは、4月中旬から5月初旬（GW頃）まで、さまざまな種類の桜を楽しむことができます。黒を基調とした美術館の建築と、淡いピンク色の対比はこの時期にしか見ることのできない特別な景色であるため、毎年多くのお客様よりご好評をいただいております。

天気の良い日には、広い敷地内に点在する大型の現代美術作品を鑑賞しながら、屋外散策をお楽しみください。



HARA MUSEUM ARC

【開催概要】

展覧会名 Yの冒険—原美術館コレクション

会 期 2019年3月9日[土]—6月30日[日]

会 場 ハラ ミュージアム アーク 現代美術ギャラリー

群馬県渋川市金井 2855-1 Tel:0279-24-6585/Fax:0279-24-0449

休 館 日 木曜（3月21日、5月2日は開館）

入 館 料 一般 1,100 円、大高生 700 円、小中生 500 円

※「狩野派の画人たち—原六郎コレクションの名品」展（特別展示室 観海庵）も併せてご覧いただけます。

■原美術館メンバーシップ会員無料、70歳以上半額、20名様以上団体割引。学校団体は特別料金規定あり。

■伊香保グリーン牧場とのセット券

（一般 1,800 円、大高生 1,500 円、中学生 1,400 円、小学生 800 円）※GW 期間は除く

■群馬県内の小中学生は学期中の土曜の入館無料。ぐーちょきパスポートのご提示により5名様まで入館料各 200 円割引。

交通案内

JR 上越線「渋川駅」より(上越・北陸新幹線

利用の場合は「高崎駅」で上越線に乗り換え)

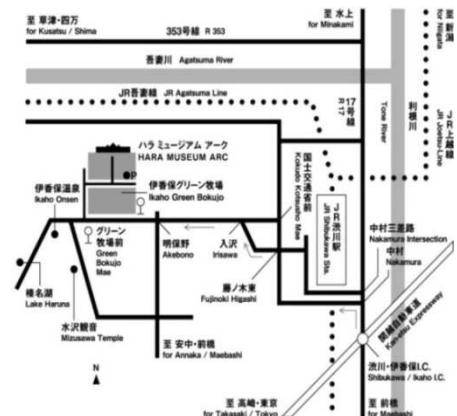
伊香保温泉行きバスにて約 15 分、「グリーン牧場前」下車、徒歩 7 分。

「渋川駅」よりタクシーで約 10 分。

車の場合、関越自動車道「渋川・伊香保 I.C.」

より 8km、約 15 分。無料駐車場あり。

(館内・駐車場はバリアフリーです)



【WEB】 <http://www.haramuseum.or.jp>

【twitter】 <http://twitter.com/HaraMuseumARC>

次回展のお知らせ

加藤泉「無題」2006年 Olzumi Kato

加藤泉個展（仮題）

会期：2019年7月13日[土]—2020年1月13日[月・祝]

どこか原始美術を思わせるミステリアスで力強い造形を特徴とする加藤泉。

絵画から出発して木の彫刻に進み、さらに最近では石・布など幅広い素材に取り組むとともに、よりダイナミックなインスタレーションを展開しています。

2007年のヴェネツィアビエンナーレなど、欧米・アジア各国で精力的に発表を重ねてきた加藤泉の展覧会を、原美術館（東京都品川区）、ハラ ミュージアム アーク（群馬県渋川市）の2館で開催します。

都内の美術館では初の個展となる原美術館では、新作の絵画・彫刻を主軸に展示、またハラ ミュージアム アークでは、これまでの代表作を中心に作家秘蔵の未発表作品なども紹介。両館で作家の全貌に迫る意欲的な試みです。



取材・図版提供などのお問い合わせ先：ハラ ミュージアム アーク 広報 山川、柳田（担当学芸員 青野）

Tel 0279-24-6585 Fax 0279-24-0449 E-mail press@haramuseum.or.jp